

一号墳は、直径20m、高さ約4mの墳丘内に、南に開く横穴式石室を築いている。石室は全長7m余りで、大山産出の緑泥片岩の割石を積み上げ、高さ3mの玄室を築く為石室上部空間を4本の石の梁で補強し、さらに前後を2本の石柵で支えている。JR黒江駅の向こう側にある山崎山山頂には、前方後円墳を含んだ15基の山崎山古墳群がある。

(今回は時間の関係で割愛した)



室山一号墳石室

【紀三井寺】

和歌山市紀三井寺

名草山中腹に建つこの寺は、正式には「紀三井山金剛宝寺護国院」と号し、救世観音宗の総本山で、西国三十三所観音霊場の第2番札所である。

寺伝によれば、<sup>19</sup>光仁天皇の宝龜元年(770)唐僧 為光上人自らが彫刻した木造十一面観音菩薩立像(国重文)を本尊として僧堂を建立して安置したのが創まりであると云う。

名草山に三つの霊泉(吉祥水、清浄水、楊柳水)が湧き、「三井水」として環境省選定の「日本名水百選」に認定され、これが寺名の由来になったと云う。境内からは、景勝 和歌浦をはじめ、淡路島・四国も遠望でき、



紀三井寺

春は早咲き桜の名所として名高く、観光地として観音信仰の隆盛と伴い参拝者で賑わっている。

【玉津島神社：県史跡】

和歌山市和歌浦中

聖なる地、国名勝「和歌の浦」に佇む玉津島神社は、古来より和歌の神を祀る神社として、天皇や貴族、歌人達に崇拜されてきた。創建は上古と極めて古く、社伝には「玉津島の神は上つ世から鎮まりませる」とあり、<sup>わかひるめ</sup>稚日女尊(丹生都比売神)、<sup>おきながたらしひめ</sup>息長帯姫命(神功皇后)、<sup>そとおりひめ</sup>衣通姫尊(<sup>19</sup>允恭天后)、<sup>あかのうらのみたま</sup>明光浦霊の4柱を祭神とする。



玉津島神社

慶長5年(1186)、紀伊国に転封された浅野幸長が社殿を造営し、万治年間(1658 ~61)には、徳川頼宣が、宝殿、拝殿、神庫を再興した。

〈玉津島〉

一帯は玉出島とも云われ、万葉集にもあるように、古代、満潮時には6つの島山が、あたかも玉のように海中に点在する島であった。

柿本人麻呂の相聞歌。

玉津島 磯の浦みの 真砂にも

匂いてゆかな 妹が触れけむ 万葉集#1797

風光明媚な和歌浦は、古代から<sup>45</sup>聖武天皇や<sup>48</sup>称徳天皇、<sup>50</sup>桓武天皇等に愛され、中でも聖武天皇は、神亀元

年(724)紀伊国へ行幸して玉津島に到り、浦の名前を弱浜から明光浦に改め、明光浦霊を合祀され、詔により保護されるようになった。

【和歌山城】

和歌山市一番丁

天正13年3月(1585)、羽柴秀吉は、10万余りの大軍を率いて、雑賀衆・根来衆などの紀州勢を攻め落とした。

秀吉が、市内岡山に紀州支配の拠点となる城郭を、藤堂高虎に命じて築造したのが和歌山城である。

当初城主として弟 秀長に与えたが、慶長5年(1600)関ヶ原の戦いで徳川勢についた浅野幸長が城主となり、城と城下町の整備に着手し、大天守・小天守・角櫓・多聞櫓などが造営された。



和歌山城大天守

元和5年(1619)7月、徳川頼宣(家康10男 秀忠弟)が入城し、以後紀州徳川藩の本拠居城として明治維新まで続くのである。

昭和20年7月9日、和歌山大空襲で、天守閣は焼失したが、昭和35年に鉄筋コンクリート造の現在の天守閣が再建された。

【総持寺】

和歌山市梶取

総持寺は、受陽山知足院と号し、梶取本山とも呼ばれ、阿弥陀如来座像を本尊とする西山派浄土宗の寺院である。

宝徳2年(1450)、明秀上人(伝 赤松則村孫)によって開かれ、後、皇室の帰依を受け

106 後奈良天皇・106 正親町天皇からそれぞれ綸旨が出されて勅願寺となった。



総持寺総門

秀吉の紀州攻めで焼失したが、秀長により再興されたと云う。

現在も和歌山における西山派浄土宗の根本道場で、元文元年(1735)建立の開山堂のほか本堂・鐘楼・総門(いずれも県文化財)・釈迦堂など、江戸時代末期までの建造物が残っている。

【大谷古墳】

和歌山市大谷

紀ノ川の下流域の右岸、和泉山脈が沖積平野に没せんとする南麓から派生した丘の突端に、あたかも平野を見下ろすかのように営まれた、晒山古墳群を形成する11基の古墳の一つ、全長67m、後円部径30mの前方後円墳である。その築造手法は古式だが、造営時期は5世紀後半～6世紀初頭と見られる。

埋葬施設は、後円部中央の墓壇に直接埋められた組合せ式の家形石棺である。石材は大分県九重山系の火山岩質凝灰岩で、屋根型をした2枚継ぎの蓋石の両側には、6個の縄掛け環状突起がある。

副葬品はいずれも大陸の色彩極めて濃く、特に馬具類は優作でその殆どが重文に指定され、和歌山市立博物館に保管・展示されている。中でも馬冑は東アジアに出土

例がなく、国内で唯一ほぼ完全な形で発見された重要な遺物と云われている。

被葬者は、この地域に基盤を置いていた紀氏一門の、紀角宿祢（<sup>15</sup>応神紀に百済の無礼を責めて出兵した時の將軍の一人）または、<sup>21</sup>雄略9年（465）新羅に遠征して利あらず病死した紀小弓宿祢、その父で弔い合戦に新羅に遠征した紀大磐宿祢の何れかと思われる。



大谷古墳出土の馬冑

メモ

